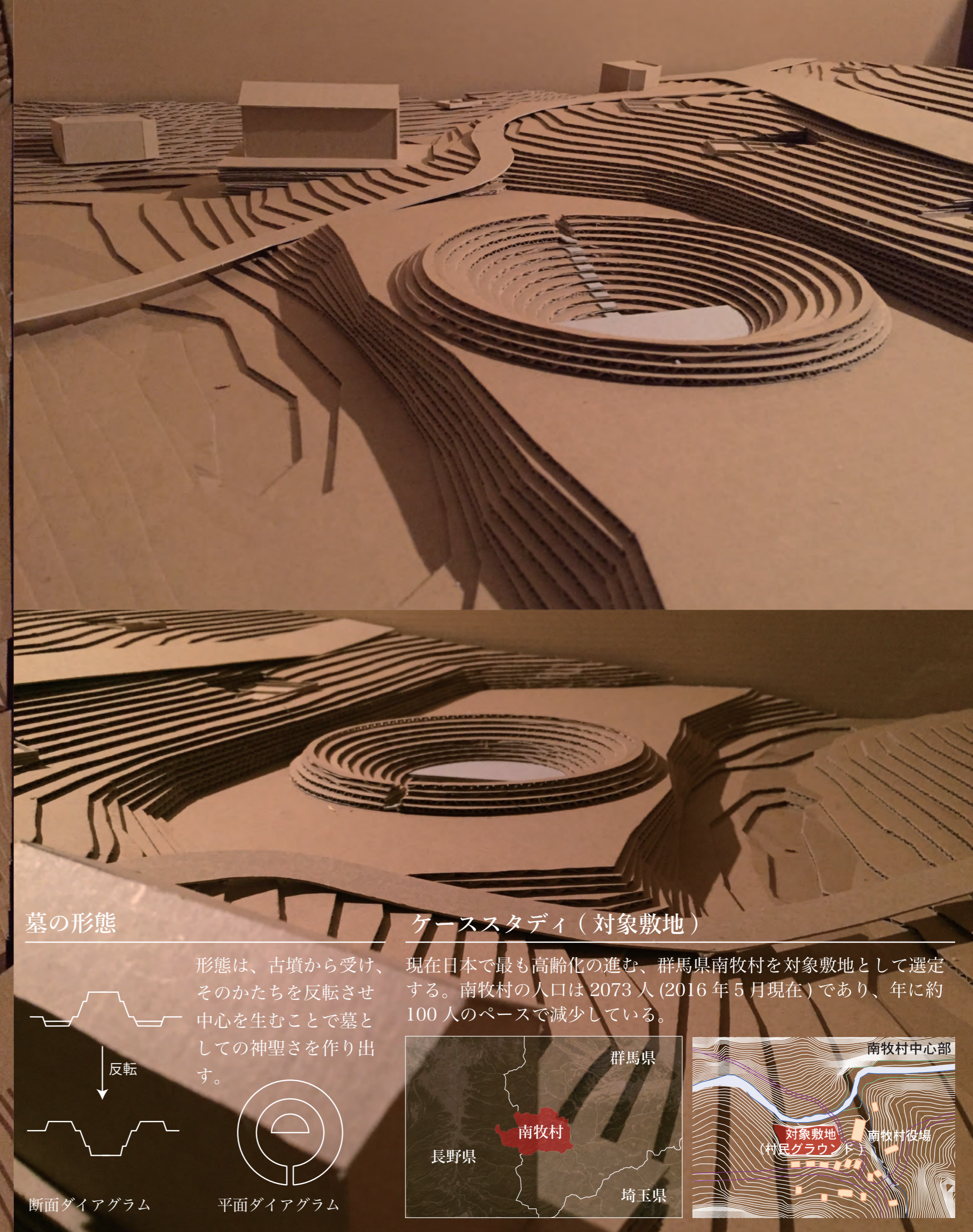


# このまち遺し —消えゆくまちへの鎮魂歌—



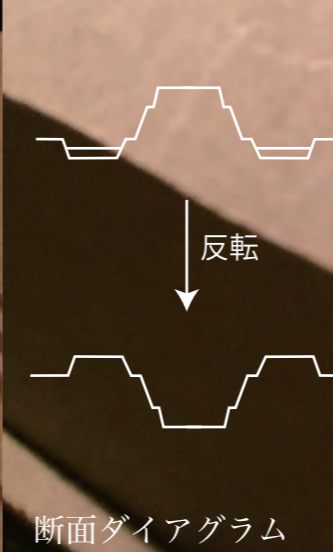
## 「まちおこし」の陰で

人口減少時代を迎え、「まちおこし」や「まちづくり」といった言葉が飛び交っている。しかし、中には「今のまま静かに暮らしたい」という思いを持つ住民もいる。「まちおこし」が叫ばれる時代の陰で、声なき声、どのまちにもあるのではないだろうか。

## 「まちおこし」から、「まち遺し」へ

まちの未来を考えると、活性化させるだけではなく、まちを終わらせるという選択肢は考えられないだろうか。強引なまちおこしは、一時的な延命装置にすぎないのではないか。そこで、人々が愛したまちの遺し方を提案する。

## 墓の形態

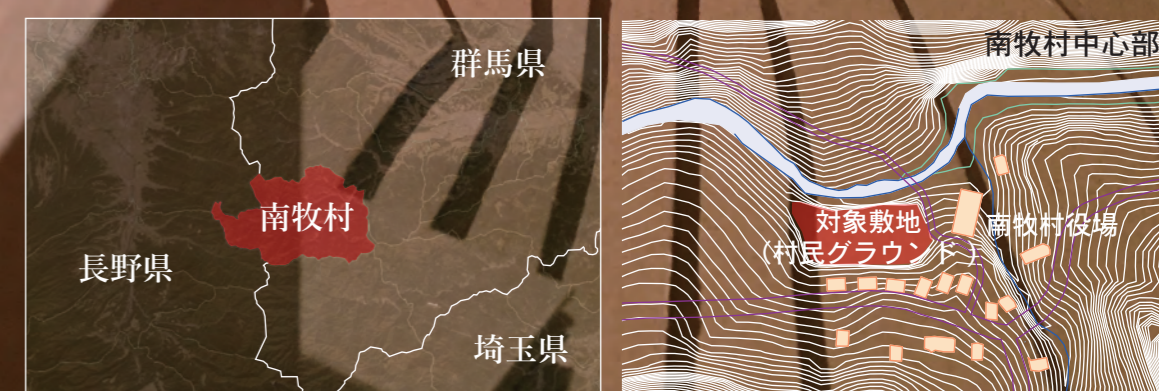


形態は、古墳から受け、そのかたちを反転させ中心を生むことで墓としての神聖さを作り出す。



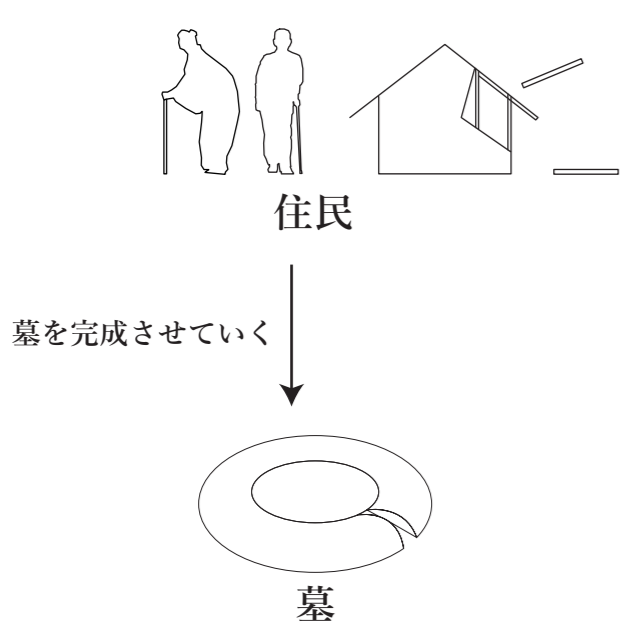
## ケーススタディ（対象敷地）

現在日本で最も高齢化の進む、群馬県南牧村を対象敷地として選定する。南牧村の人口は2073人（2016年5月現在）であり、年に約100人のペースで減少している。

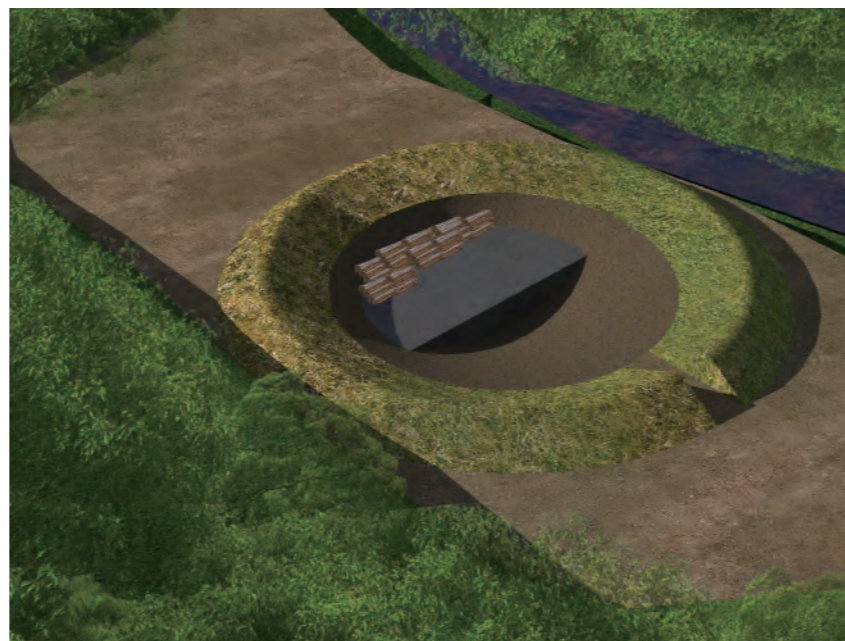


## コンセプトダイアグラム

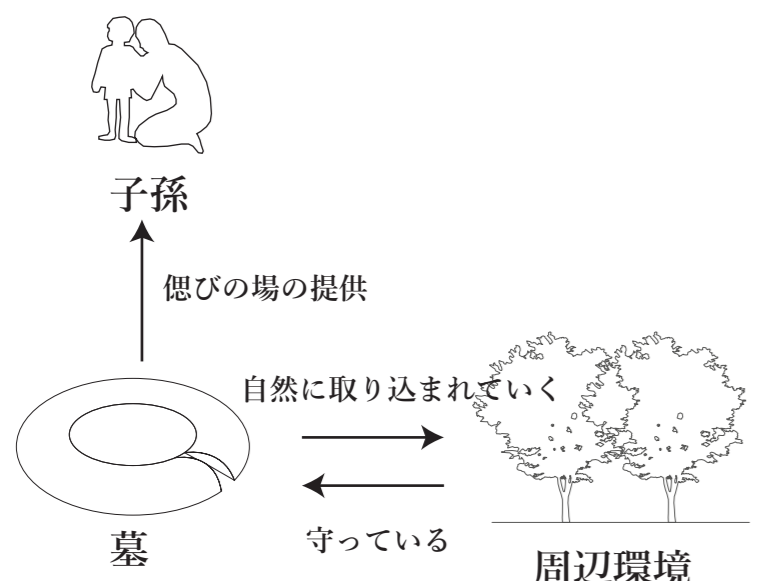
現代



現代：現在～数十年  
まちが衰退に向かい、墓の建設が始まる。住民は墓に思い出の品々やそのまちの文化財などを納めていき、解体される木造家屋の廃木材で墓を埋めていくことで墓を完成させる。



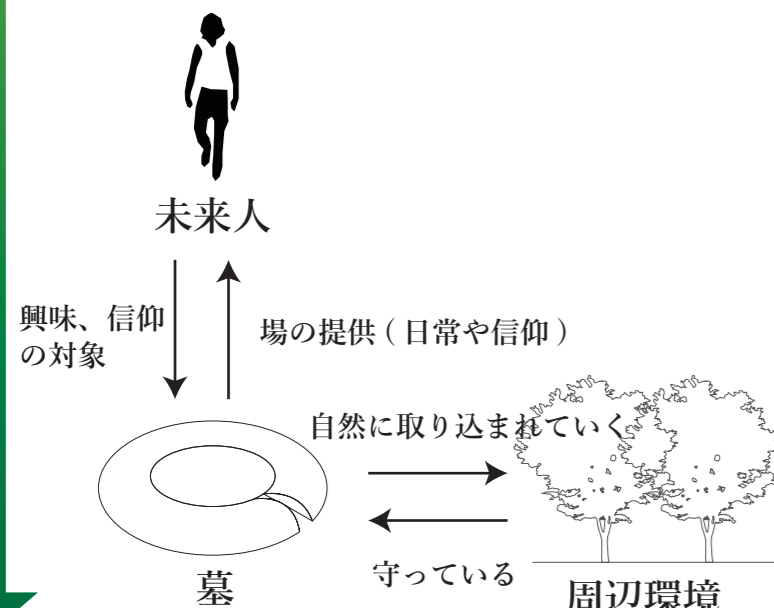
近未来



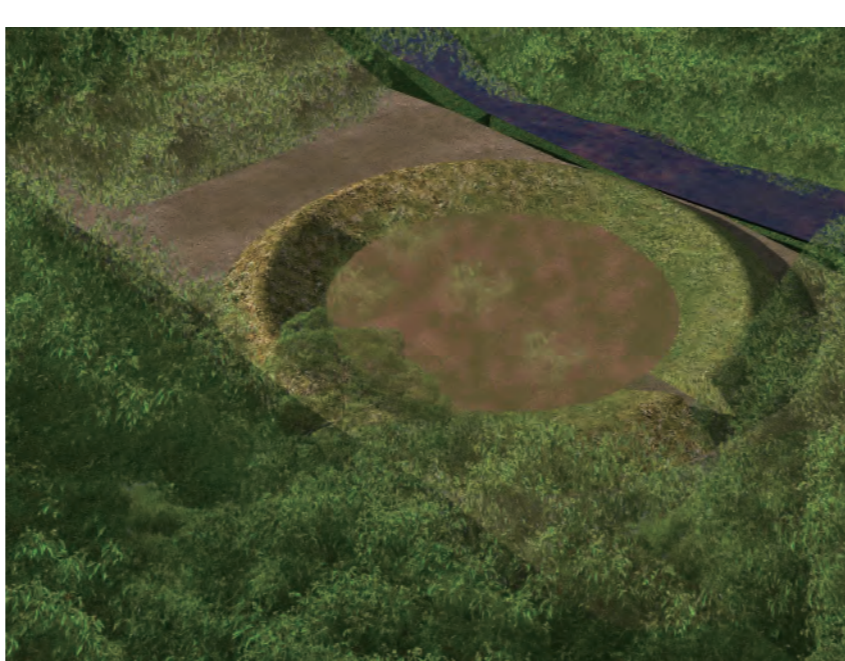
近未来：数十年～数百年  
まちが遺され、かつての住民の子孫がまちに偲びにくる。墓自体は、廃木材が朽ち始め、自然へ還っていく。また、墓は埋まっていることで、外的影響から守られている。



未来



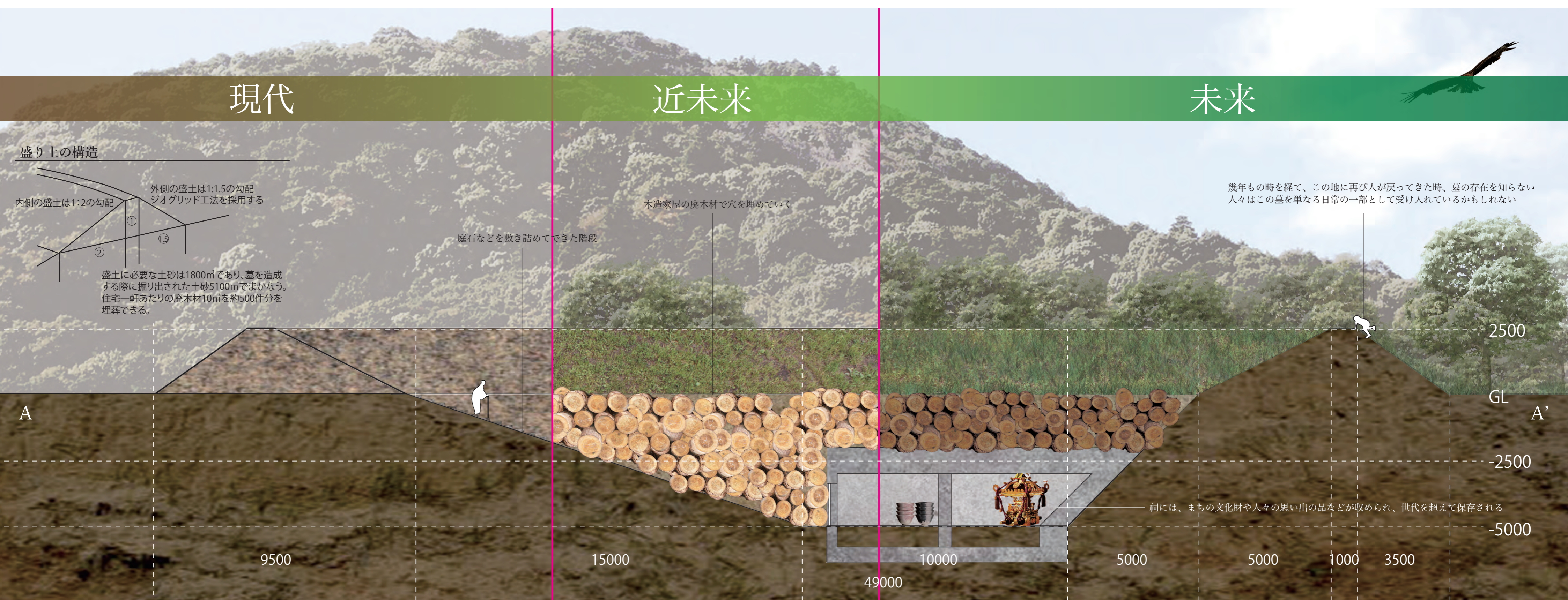
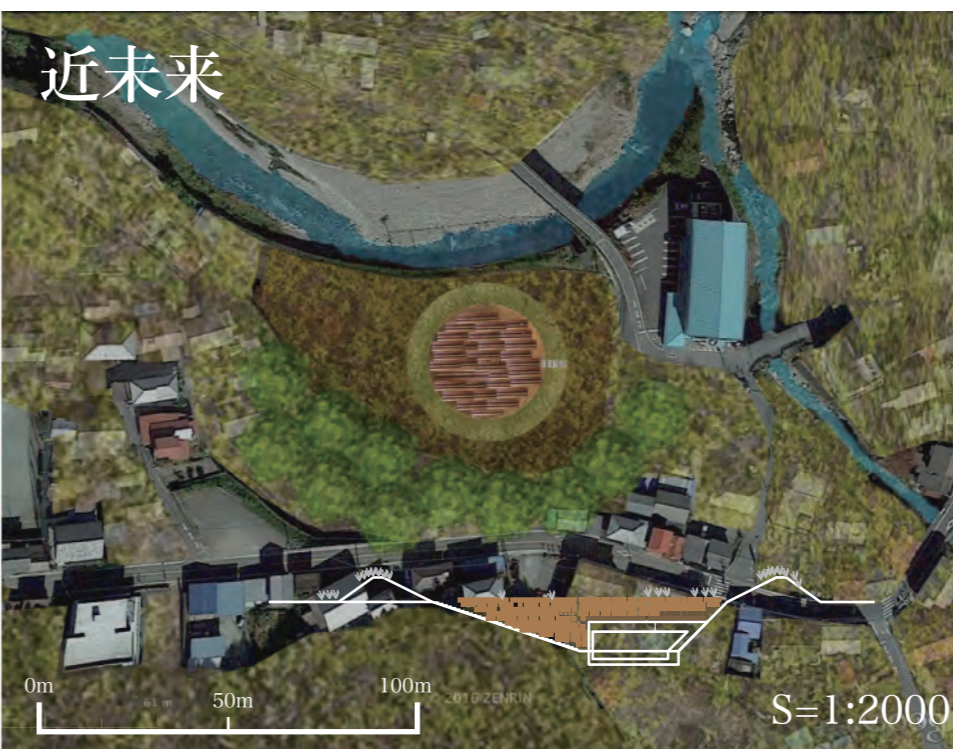
未来：数百年～数千年  
墓は、森に還るかもしれないし、再び人が集まりまちができるかもしれない。この時、未来人にとっての興味や信仰の対象になったり、日常の遊び場になっているかもしれない。



墓は、時を超えた相互作用を起こす

AA' 断面 S=1:100

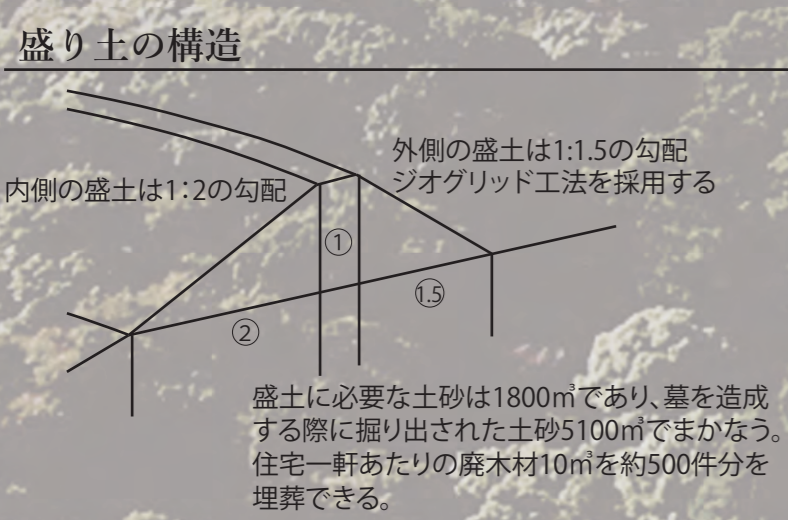
## マスタープラン



現代

近未来

未来



庭石などを敷き詰めてきた階段

木造家屋の廃木材で穴を埋めていく

幾年もの時を経て、この地に再び人が戻ってきた時、墓の存在を知らない人々はこの墓を単なる日常の一部として受け入れているかもしれない

祠には、まちの文化財や人々の思い出の品などが収められ、世代を超えて保存される